

## 【研究論文】

子育ての悩みと、親と子どもの発達センターの役割についての検討  
—利用者の育児の「困り事」、「相談相手」、「相談方法」の分析から—

## The parental dilemma in child-rearing

## and the role of Parent-Child Developmental Center

## : Analysis of user's stress of child-rearing, adviser, method of consulting

岸本美紀\* 小原倫子\* 白垣潤\* 野田美樹\*\*

丸山笑里佳\*\* 安藤久美子\*\*\* 早川仁美\*\*\* 武藤久枝\*\*\*\*

KISHIMOTO Miki, OBARA Tomoko, SHIRAGAKI Jun, NODA Miki,

MARUYAMA Erika, ANDO Kumiko, HAYAKAWA Hitomi, MUTO Hisae

## 要 旨：

本研究の目的は、保護者の子育ての悩みを把握することで、「親と子どもの発達センター」の役割について示唆を得ることである。そのため、育児における「困り事の内容」、「相談相手」、「相談方法」に関する質問紙調査を「親と子どもの発達センター」の利用者に実施した。そして、72名の母親の回答を分析した結果、育児の「困り事の内容」は「しつけに関すること」が出現率第1位であった。保育所の0～2歳児クラスの保護者と比較した結果、分析対象者の「しつけに関すること」の出現率が有意に高かった。「相談相手」については、出現率1位は「夫」であった。保育所の0～2歳児クラスの保護者と比較した結果、「友人」の出現率は分析対象者が有意に高かった。「相談方法」では、「直接会って話す」の出現率が第1位であった。これらの結果を踏まえ、保護者のニーズに合った講座の実施や支援体制を検討する必要性が示唆された。

## Abstract

Analysis of a questionnaire of the users of the “Parent-Child Developmental Center,” used to ascertain the role of the Center. The questionnaire asked about stress of child-rearing, who the parents consulted most often, and what method of consulting they found most useful. Center users mentioned “discipline” most often, which was significantly higher than day-nursery users. “Husbands” were consulted the most often, and “friends” were mentioned more often than day-nursery users. “Face-to-face consulting” was the most preferred method. Lectures and a support system that fit the needs of parents is necessary.

キーワード：親と子どもの発達センター、育児の困り事、相談相手、相談方法、質問紙調査

Keyword: Parent-Child Developmental Center, stress of child-rearing, adviser, method of consulting

## I. はじめに

岡崎女子大学・岡崎女子短期大学「親と子どもの発達センター」は、①「人材育成の拠点」、②「親子発達研究の拠点」、③「地域貢献活動の拠点」

を目標とし、平成25年6月に活動を開始した。開始以降、「子育て実践講座」、「みんなで子育て」、「発達を理解する連続講座」、「コミュニケーション・セミナー」などを企画し、実施している。その際、「親と子どもの発達センター」の役割

\*岡崎女子大学子ども教育学部

\*\*岡崎女子短期大学幼児教育学科

\*\*\*親と子どもの発達センター職員（保育士）

\*\*\*\*中部大学現代教育学部

を理解し、地域で子育てをしている保護者のニーズに合致した活動を展開することを目指してきた。この観点に基づき、我々は「親と子どもの発達センター」の利用者アンケートを分析することで、役割について考察を行った(小原他、2014)<sup>1)</sup>。その結果として、48.6%の保護者が子育てで悩みや迷いがあることが明らかとなり、子育て支援施設としての「親と子どもの発達センター」の役割が示された。

本研究では、小原他(2014)<sup>1)</sup>で得られた結果をもとに、子育ての悩みや困り事に焦点を当てることで、「親と子どもの発達センター」の役割について改めて考察を行う。そして、その結果を活動内容に反映させることで、子育て支援施設としての活動の充実を目指す。

検討の方法については、小原他(2014)<sup>1)</sup>で把握した子育ての悩みが、自由記述で得られたことにより母数が少ない点をまず考慮する。そこで、育児における困り事が項目化された岸本・武藤(2013)<sup>2)</sup>の質問紙調査を利用する。岸本・武藤(2013)<sup>2)</sup>は、幼稚園に子どもを通わせている保護者(以下「幼稚園保護者」とする)が分析の対象であるため、質問項目を一部修正して使用する。次に、「親と子どもの発達センター」利用の子どもとほぼ同年齢である保育所の0～2歳児について、その保護者(以下「保育所保護者」とする)の結果との比較を試みる。比較した結果から、「親と子どもの発達センター」の保護者の特徴を明らかにし、「親と子どもの発達センター」における支援のあり方について示唆を得ることとする。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 調査対象者及び方法

2014年7月2日から10月30日まで、子どもと「親と子どもの発達センター」を利用した保護者に質問紙調査を行った。調査票の配布は担当保育士から直接行った。回収は、担当保育士への直接提出が17名、郵送が56名であった。11月7日までに回収した。きょうだい等複数の子どもが通う場合は、「親と子どもの発達センター」に通う一番年上の子1名についてのみ回答することを求めた。

### 2. 調査内容

調査票は、フェイスシートを含めた約60項目の質問で構成されている。質問項目の主な内容は、現在育児で困っている事の有無(以下、「困り事の有無」とその内容(以下、「困り事の内容」)、その相談相手(以下、「相談相手」)、および相談しやすい方法(以下、「相談方法」)等である。

- (1)「困り事の内容」:「困り事の内容」は、31個の項目で構成され、この中から当てはまる項目を5個まで選択するように複数回答を求めた。項目の作成にあたっては、三重県乳幼児教育センター(2002)<sup>3)</sup>、久保山ほか(2009)<sup>4)</sup>の先行研究を基にした。31個の主な内訳は、「食事について」「排泄のこと」「こだわりが強い」「落ち着きがない」「しつけに関すること」などである。
- (2)「相談相手」:「相談相手」は、17個の項目で構成され、この中から当てはまる項目を3個まで選択するよう複数回答を求めた。項目の作成にあたっては、松尾ほか(1992)<sup>5)</sup>、三重県乳幼児教育センター(2002)<sup>3)</sup>の先行研究を基にした。17個の主な内訳は、「夫」「実母」「義母」「友人」「担任」などである。
- (3)「相談方法」:「相談相手」は、8個の項目で構成され、この中から当てはまる項目を3個まで選択するよう複数回答を求めた。項目の作成にあたっては、三重県乳幼児教育センター(2002)<sup>3)</sup>の先行研究を基にした。

### 3. 分析方法

- (1)分析対象者内での分析

全項目について単純集計を行った。次に、子どもの性別(男・女)、子どもの出生順位、母親の就労をキー項目として、「困り事の内容」「相談相手」「相談方法」をクロス項目とするクロス集計を行った。また、セル内5以上が出現した場合に $\chi^2$ 検定を実施した。

- (2)「保育所保護者」との比較

岸本・武藤(2013)<sup>6)</sup>は、「保育所保護者」481名を分析対象者としている。そのうちの、「親と子どもの発達センター」に通う子どもとほぼ同年齢である、0～2歳児クラスの「保育所保護者」121名との比較を行った(以下「0～2歳児クラス保育所保護者」とする)。

施設(「親と子どもの発達センター」・「0～2歳児クラス保育所保護者」)をキー項目として、「困

り事の内容」「相談相手」「相談方法」をクロス項目とするクロス集計を行った。また、セル内5以上が出現した場合に $\chi^2$ 検定を実施した。

統計解析には、SPSS (Statistical Package for the Social Science) 解析ソフト (第15版 for windows) を用いた。

#### 4. 倫理的配慮

調査趣旨に同意した回答者による無記名での回答である。

### Ⅲ. 結果及び考察

#### 1. 分析対象者

2014年7月2日から10月30日までの間に、「親と子どもの発達センター」を利用した保護者のうち、新規利用者など質問紙調査に未回答の保護者を調査対象者とした。期日までに回収があったのは73名であり、記述に不備のあったものを除く72名を有効回答者とした。

本研究では、有効回答者の分布から、父親、祖父母と50歳代以降の回答がなかったことから、20代から40代の母親72名を分析対象者とする。

分析対象者となった母親の年齢は、30代56名 (77.8%)、20代11名 (15.3%)、40代5名 (6.9%) であった。就労状況は、未就労58名 (80.6%)、正規就労12名 (16.7%)、パート就労2名 (2.8%) であった。

分析対象者の子どもの平均月齢は、25.2か月 (範囲8～47か月、SD $\pm$ 8.67) であった。

#### 2. 分析対象者の「困り事の内容」

##### (1)平均個数

分析対象者の育児における「困り事の内容」の平均個数は、2.82個 (SD:  $\pm$ 1.69) であった。

##### (2)出現率

分析対象者の育児における「困り事の内容」について、出現率の高い順に表1に示す。

出現率の第1位は、「しつけに関すること」25名 (34.7%) であり、分析対象者の約3分の1が困っている。「幼稚園保護者」を対象とした岸本・武藤(2013)<sup>2)</sup>、「保育所保護者」を対象とした岸本・武藤(2014)<sup>6)</sup>では、ともに出現率の第1位が「食事について」であった(幼稚園:101名、25.6%、保育所:80名、22.2%)。以下、第2位「落ち着きがない」・「食事のこと」17名 (23.6%)、第4位「排泄のこと」15名 (20.6%)、第5位「乱暴、手が出る」13名 (18.1%) と続く。

「乱暴、手が出る」は、岸本・武藤(2013)<sup>2)</sup>、岸本・武藤(2014)<sup>6)</sup>では、出現率の上位10項目に入っていなかった。「親と子どもの発達センター」保護者の特徴として、未就労が約8割を占め、かつ子どもの平均月齢が2歳前後という点が挙げられる。2歳前後の子どもは、自己主張が盛んであり、まだ言葉で自分の思いを伝えることが難しく、手が出やすい。そのような発達過程の子どもと生活したり子ども集団で過ごしたりする時間が長いことが、本研究の結果の要因として推察される。

##### (3)クロス集計結果

育児の「困り事の内容」について、子どもの性別 (男・女)、子どもの出生順位、母親の就労によって、出現率に有意な差は見られなかった。

表1 育児の「困り事の内容」

	度数 (%) (n=72)
しつけに関すること	25(34.7)
落ち着きがない	17(23.6)
食事のこと	17(23.6)
排泄のこと	15(20.6)
乱暴、手が出る	13(18.1)
言うことを聞かない	12(16.7)
言葉が遅い	9(12.5)
こだわりが強い	9(12.5)
睡眠のこと	9(12.5)
病気のこと	8(11.1)
子どもの性格について	7(9.7)
皆と同じようにできない	4(5.6)
集団活動に参加しない	4(5.6)
子どもの友達関係について	4(5.6)
慣れにくい	4(5.6)
人見知りが強い	4(5.6)
保護者同士の関係について	4(5.6)
健康のこと	4(5.6)
発達の遅れ	4(5.6)
習い事について	4(5.6)
保育所について	4(5.6)
人とかかわることが苦手	3(4.2)
子育て方針について	3(4.2)

家族関係について	2(2.8)
運動が苦手	1(1.4)
不器用	1(1.4)
夫婦関係について	1(1.4)
小学校に入ってからついていけないか心配	0(0.0)
言葉が聞き取りにくい	0(0.0)
登園渋り	0(0.0)
その他	12(16.7)
	204(283.7)

### 3. 分析対象者の「相談相手」

#### (1)平均個数

分析対象者の育児における困り事の「相談相手」の平均人数は、2.21人 (SD: ±0.96) であった。

#### (2)出現率

分析対象者の育児における困り事の「相談相手」について、出現率の高い順に表2に示す。

出現率の第1位は、「夫」55名 (76.4%) であり、分析対象者の約7割以上が「夫」に相談をしている。「幼稚園保護者」を対象とした岸本・武藤(2013)<sup>2)</sup>、「保育所保護者」を対象とした岸本・武藤(2014)<sup>6)</sup>と、よく似た結果であった(幼稚園: 307名, 77.7%、保育所: 245名, 68.1%)。以下、第2位「友人」46名 (63.9%)、第3位「実母」34名 (47.2%)、第4位「きょうだい」6名 (8.3%)、第5位「義母」5名 (6.9%) と続く。

「幼稚園保護者」を対象とした岸本・武藤(2013)<sup>2)</sup>、「保育所保護者」を対象とした岸本・武藤(2014)<sup>6)</sup>の結果と比較すると、上位5項目は同じであった。しかし、これらは第2位「実母」(幼稚園: 228名、57.7%、保育所: 192名、53.3%)、第3位「友人」(幼稚園: 202名、51.1%、保育所: 139名、38.6%) であった。「親と子どもの発達センター」保護者は、「友人」の出現率が高い結果であった。

加えて、小原他(2014)<sup>1)</sup>は、「親と子どもの発達センター」保護者に、「子育てについて相談する人」を尋ねている。小原他(2014)<sup>1)</sup>でも、配偶者(69名、82.1%)、両親(62名、73.8%)、友人(54名、63.4%)に相談する人がほとんどであった。項目の設定は異なるが、本研究もよく似た結果であり、行政機関等に相談する人は少数であった。

表2 育児の困り事の「相談相手」

	度数(%)
	(n=72)
夫	55(76.4)
友人	46(63.9)
実母	34(47.2)
きょうだい	6(8.3)
義母	5(6.9)
担任以外の保育者	4(5.6)
医師	3(4.2)
保健師	2(2.8)
実父	1(1.4)
カウンセラー	1(1.4)
義父	0(0.0)
親戚	0(0.0)
担任	0(0.0)
園長・主任	0(0.0)
看護師	0(0.0)
その他	2(2.8)
誰にも相談しない	2(2.8)
	161(223.7)

#### (3)クロス集計結果

分析対象者の育児における困り事の「相談相手」について、子どもの性別(男・女)、子どもの出生順位、母親の就労によって、出現率に有意な差は見られなかった。

### 4. 分析対象者の「相談方法」

#### (1)平均個数

分析対象者の育児における困り事の「相談方法」の平均個数は、1.57人 (SD: ±0.84) であった。

#### (2)出現率

分析対象者の育児における困り事の「相談方法」について、出現率の高い順に表3に示す。

出現率の第1位は、「直接会って話す」60名 (83.3%) であり、分析対象者の約8割以上が「直接会って話す」ことを希望している。「幼稚園保護者」を対象とした岸本・武藤(2013)<sup>2)</sup>、「保育所保護者」を対象とした岸本・武藤(2014)<sup>6)</sup>でも、出現率の第1位は「直接会って話す」であった(幼稚園: 355名、89.9%、保育所: 328名、91.1%)。以下、第2位「メール」22名 (30.6%)、第3位「電話」19名 (26.4%)、第4位「チャット」7名 (9.7%)、第5位「ツイッター」3名 (4.2%) と続く。

上記の岸本・武藤(2013)<sup>2)</sup>、岸本・武藤(2014)<sup>6)</sup>の結果と本研究の結果を比較すると、上位3項目は同じであった。しかし、これらは第2位「電話」(幼稚園:147名、37.2%、保育所:109名、30.3%)、第3位「メール」(幼稚園:132名、33.4%、保育所:87名、24.2%)であった。「親と子どもの発達センター」の保護者の結果と異なり、第2位と第3位の項目が逆転している。

表3 育児の困り事の「相談方法」

	度数(%) (n=72)
直接会って話す	60(83.3)
メール	22(30.6)
電話	19(26.4)
チャット	7(9.7)
ツイッター	3(4.2)
フェイスブック	1(1.4)
ラジオ	0(0.0)
その他	1(1.4)
	113(157.0)

### (3)クロス集計結果

分析対象者の育児における困り事の「相談方法」について、子どもの性別(男・女)、子どもの出生順位、母親の就労によって、出現率に有意な差は見られなかった。

## 5. 保育所保護者との比較

### (1)育児の「困り事の内容」

育児の「困り事内容」について、「親と子どもの発達センター」に通う子どもとほぼ同年齢である「0～2歳児クラス保育所保護者」(121名)の結果と比較を行った。

出現率で有意な差がみられたのは「しつけに関すること」であり、本研究の分析対象者の出現率が有意に高かった(センター:25名、34.7%、保育所0～2歳児:24名、19.8%、 $\chi^2=5.28$ 、 $p<.05$ )。「親と子どもの発達センター」の保護者の方が、しつけに困っている割合が高いことがわかった。

### (2)育児の困り事の「相談相手」

育児の困り事の「相談相手」について、「0～2歳児クラス保育所保護者」(121名)の結果と比較を行った。

出現率で有意な差がみられたのは、「友人」で

あり、本研究の分析対象者の出現率が有意に高かった(センター:46名、63.9%、保育所0～2歳児:47名、38.8%、 $\chi^2=11.34$ 、 $p<.01$ )。「親と子どもの発達センター」の保護者が、育児の困り事の「相談相手」として、「友人」を重視していることがうかがわれる。

一方で、「幼稚園保護者」(岸本・武藤、2013)と「保育所保護者」(岸本・武藤、2014)の結果を比較した岸本・武藤(2014)<sup>7)</sup>では、「幼稚園保護者」の「友人」の出現率が有意に高かった(幼稚園:202名、51.1%、保育所:139名、38.6%、 $\chi^2=11.94$ 、 $p<.01$ )。この点については、「親と子どもの発達センター」保護者は80.6%が未就労であり、幼稚園保護者も72.0%が未就労であったことから<sup>2)</sup>、保護者の就労が影響していることが推察される。

### (3)育児の困り事の「相談方法」

育児の困り事の「相談方法」について、「0～2歳児クラス保育所保護者」(121名)の結果と比較を行ったが、出現率に有意な差は見られなかった。

## IV. まとめと今後の課題

本研究の結果では、「親と子どもの発達センター」保護者は、育児の「困り事の内容」において「しつけに関すること」が出現率の第1位であった。また、この出現率は、「親と子どもの発達センター」を利用する子どもとほぼ同年齢である保育所の0～2歳児クラスに子どもを通わせる保護者の結果と比較すると、有意に高いことが分かった。「親と子どもの発達センター」保護者の約3分の1が、しつけについて悩んだり困ったりしていることから、個別の相談やしつけに関する講座を行うなどの取り組みの必要性を理解した。

また、育児の困り事の「相談相手」については、幼稚園に子どもを通わせる保護者、保育所に子どもを通わせる保護者と同様に、「夫」の出現率が最も高かった。約7割以上が「夫」に相談すると結果であった。本研究の結果から、母親にとって「夫」の存在の大きさが理解できる。大元(2010)は、夫の育児協力が妻の育児に良好な影響を与えるという幾つかの研究を紹介している<sup>8)</sup>。加えて、これらの研究を踏まえ、父親に対する子育て支援の取り組みの重要性を示している。そのような点から、「親と子どもの発達センター」においても、父親に対する講座などの取り組みを検

討する必要があると考えた。しかし、「親と子どもの発達センター」保護者の中には、育児の困り事を「誰にも相談しない」と回答した者が2名(2.8%)おり、また、父親に頼れない母親もいる可能性が考えられる。そのため、小原他(2014)<sup>1)</sup>が述べたように、「親と子どもの発達センター」が、「共に考えていく場」として機能し、子育てを支援する役割を果たしていかなければならないだろう。

さらに、本研究の「親と子どもの発達センター」保護者は、保育所の0～2歳児クラスに子どもを通わせる保護者より、「友人」に育児の困り事を相談する割合が有意に高かった。就労していない保護者が約8割を占める「親と子どもの発達センター」保護者にとって、相談相手としての「友人」の重要さがうかがわれた。本研究の結果から、保護者同士のつながりを活かした活動を支援したり、新たな友人をつくる機会を設けたりするという、新たな「親と子どもの発達センター」の役割が期待されるのではないだろうか。

そして、「親と子どもの発達センター」保護者の約8割以上が、育児の困り事を「直接会って話す」という相談方法を希望していた。保護者の期待に添えるよう、相談しやすい雰囲気をつくったり、相談の機能を充実させたりすることが求められると考える。スタッフがその点を意識するだけでなく、保護者のニーズに合わせた相談支援の体制の検討が必要と考える。

## 謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました「親と子どもの発達センター」保護者、関係者の皆様に深く感謝いたします。

## 文献

- (1)小原倫子・丸山笑里佳・岸本美紀・谷田貝雅典・安藤久美子、子育ての悩みと、親と子どもの発達センターの役割に関する一考察－親と子どもの発達センター利用者の質問紙調査から－、岡崎女子短期大学学術教育総合研究所所報、7、pp1-10、2014
- (2)岸本美紀・武藤久枝、幼稚園における保護者支援のあり方の検討－保護者が抱える子育ての困り事の分析から－、中部大学現代教育学研究紀要、6、pp15-21、2013
- (3)三重県乳幼児教育センター、子育て上の悩みと相談に関する調査研究報告書Ⅱ、2002
- (4)久保山茂樹・齊藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳、『気になる子ども』『気になる保護者』についての保育者の意識と対応に関する調査－幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言、国立特別支援教育総合研究所 研究紀要、36、pp.55-76、2009
- (5)松尾久枝・石川道子・二村真秀・内藤敬子・清水桂子・渡辺勸持、未熟児をもつ母親の心配事と相談相手－郵送による追跡調査の予後別分析－、小児の精神と神経、32(1)、pp.49-58,1992
- (6)岸本美紀・武藤久枝、保育所保護者が望む保護者支援についての検討－育児の困り事、相談相手、相談方法に関する質問紙調査による分析から－、保育士養成研究、31、pp125-134、2014
- (7)岸本美紀・武藤久枝、保護者が望む保護者支援のあり方－幼稚園と保育所の比較－、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要、47、pp17-24、2014
- (8)大元千種、父親の育児参加とその支援について、筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要、5、pp187-195、2010